
取憑

あきくん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

取憑

【Nコード】

N7687C

【作者名】

あきくん

【あらすじ】

誰が言ったか、“少し不思議”。略すとSFになりますね。そんなわけでSFな話です。お気に入りの場所で、取憑きたい少女と出会った青年の話です。

取憑

夜道を青年が一人歩いている。

青年にはお気に入りがあった。こういう言い方をすれば、それは人でありそれは食べ物であり、そしてそれは全ての好みを指している、といった具合の曖昧さをどうしても感じてしまう。しかしながら今の状況から考えるに、お気に入りとは夜の静寂や一人で歩くということであり、とりわけ最も適切なものは“場所”であると限定することが可能だと思えないこともない。

ともするなら、どうして曖昧な物言いなのか。

その場所とは別段特別な様ではなく一見してただの路地、しかしじっくり見てもやはりただの路地にしか見えない。だからそこは、やはりただの路地なのだろうと考えられる。実際青年の目にもそう見え、ならば見所のないような場所が最終目的地になるはずもなく、ただ何気なく通過するだけを目的とするしかない。そんな場所のどこがいいのか青年にも説明できないし、自分自身不思議でしょうがないというのが正直なところだった。本当にその場所に惹かれていいのか、時間帯や他のきっかけによる条件とあいまってたまたま視界に入る可能性が高いだけなのか、それすらもぼんやりとしているのだった。

はつきりしていることはただひとつ。その場所が気になっているということだけだ。だから何か限定せずに、お気に入りというものはきっとあるのだろう、ということなのだ。好きなものはしょうがないじゃないか。そう青年は納得していたし、対象は何であれ実際それが本質なのではないだろうか。

取憑

そう、青年にはある意味執着している場所があるのだ。

だからだろうか。青年が月夜の散歩中にその場所に差し掛かった

とき、いつもと違うわずかな違和感を感じられたのは。

「ん!?」

青年は反射的に違和感の方に視線を送った。しかしそこには薄暗い空間の他は何も無かった。青年は気にしないこととして歩き出したが、内心やはり気になる。無視してその場所を通過する頃には、違和感が自分への視線なのではないかと考えがまとまって確信となっていた。

別の夜。それがお気に入り性の性ということなのか、青年は自然とその場所に足を運んでいた。また感じる視線とともに、視界の隅にチラツと入ったような気がする小さい影らしきもの。顔を向けるもやはり薄暗い空間以外は何も無かった。青年は不気味なものを感じる・・・、というか正直別の感情も沸きかけていた。

別の日も同じ場所で同様の体験。それが何回続いた頃だろうか。いつしか青年は、違和感を感じると体が震えるようになっていた。それでも足が遠のくことのなかった青年が、ある日突然震える手を握り締め無言で走り出した。その場から遠ざかるのではなくその影らしきものに向かってだ。

「だれだ!」

荒々しい表情と声。青年は正直イラツときていた。確かに不気味なものに対する恐怖心がないわけではなかったが、それ以上について足を運んでしまう場所に存在する違和感がうっとうしくなっていたのだ。だから、体の振るえとは怒りや苛立ちの感情の高まりであり、もちろんそのまま放っておく気はなかった。

そんな明らかな怒りをあらわにしつつ青年はすばやく辺りを探る。「出て来い!いるのは分かってんだよ!」

とは言うものの、その声が特定の場所ではなくその場所全体を捉えているのは、どこにあるかわからないものを探すときの鉄則だ。

間をおき辺りに気を配りつつ、思い過ごしならそれでもいいと思ふものの、なぜか青年には何か自分が自分を見ているという自信があった。それがお気に入りなのなせる業なのか、そんなことはどうでもよ

く、青年としてはただ在る無しは別としてイライラの原因を払拭しただけだった。

と、

「・・・ちよつと違うでしょ。普通怖がるとかするものよ」

どこからか、闇の内よりひとりの少女がスツと顔を出した。

「なんだお前は・・・！」

予想外といえば予想外。こつもはつきりとしたものが出てくるとは青年は思っていなかった。青年の考えとしては、怒りを撒き散らしたものの何も見つからず、結局のところ自分の想いが強すぎたために感じなくていいものを感じてしまったのだと、ちよつとした哲学のように片付けるつもりだったのが・・・。

不満そうな表情のパツとしない、いかにも現実的な少女を胡散臭そうに眺めると青年は、

「なんかお前、微妙な感じだな・・・。で、何のようだ」

冷めていく自分を感じながら本題に入った。苛立ちが収まっていなく冷静さは増している。何気ないようで、怒りが直接伝わるように意思的に冷たく言った言葉だ。

「あなたを見かけたとき何か、これだ！ って思って」

少女は何も感じなかったのか、妙に明るく意味不明なことを口走りニコツと笑った。

少女とぶつかった視線をずらし少し間を空ける青年。その間少女の言葉の意味を考えてみる。これだ、これだ、これだ、・・・って、何が！！」

結果、再び苛立ち始めるだけだった。結局青年には何のことが解らないわけだが、

「だから、取憑こつと思つてたの！！」

何でわからないの、と少女は逆に不思議そうに見つめてきた。

「はああ・・・。何だ？ 幽霊か」

深く息を吐く青年は、少女への態度を決めかねているようだ。対し一貫した態度で、取憑くイコール幽霊という安直な考えに、少女

は素直に賛同しないようだった。

「さあ、でもあれでしょ。幽霊って恨みとかつらみとかで取憑くでしょ？わたしがそう見える？」

そう言いつつ、少女は無い胸をグツと張って青年に自分を見せつける。

「いや、間抜けそうには見える」

即答。

「あう……。そもそも生きてたっけ感じはないし。まあ、ただ取憑きたいだけ？」

「だけ？ ってな……。じゃあお前はいつたい何者なんだ」

青年の問いに、少女は頬に人差し指を軽く当て首をかしげる。

「だからわからないよ。……そうだ！ 取憑いてみれば何かわかるかも」

パアツと表情を明るくして、いかにもかわいく提案するも、

「いや却下。何されるかわからないし……」

再び即答。

「じゃあわたしが何者だかわからないじゃないの」

軽い口調だが、冗談を言っているわけではないことは青年にも伝わった。

だったらと、青年は少女に向かって手を伸ばす。初めは恐々と突付くように指先で少女の頭を、そして普通に触れられることを確認すると、今度はおもむろに頭を鷲づかみにしてみた。そのまま無造作に手を動かし十分に楽しんだ後、離れたその手をいろいろな角度で黙視し、続いて両手で少女の顔を引っ張ってみる。

「ただの生きてる人間という可能性は？」

感触に体温。別に怪しいところは無かったということだ。何より一番最初に考えるべき可能性ではあったが……。

「んん……。考えたこともなかった、っと……」

少女はクイツと首を動かし顔の手を引き離しにかかる。うかつにもその態度がちよつとかわいいと思った青年は、

「・・・いいから放っておいてくれ」

とりあえず関わらないことにし、去っていった。

青年はそれからしばらく、その場所を通らないようにしていた。理由は特にない。少女に会いたくないからなどということとは別段ないし、考える時間がほしかったということもなかった。自然解決を図ったのはあながちなくもないが、むしろ自ら何とかしようとしていた青年にはどうもしっくり来ない気がする。ただなんとなく、それが無意識のうちに頃合を探っていた、ということだろうか。

その証拠に、いや単にお気に入りでだからだろうか、気がつく
と青年はその場所に立っていた。

「ふっ・・・」

青年は自嘲気味に笑った。視界の隅に少女がフツと現れても、視線を持つていくだけで驚いた様子は見せなかった。時間を空けたことがよかったのか、むしろ待っていたかのように落ち着き、自然体で少女と向かい合っている。

一瞬か数分か、それは時間という概念が解らなくなるまでに、二人は無言で対峙していた。結果としては見つめ合っていたことになるが、意味合いとしては少し違う。見ていたのではなく感じようとしていたのだ。それが特別なことなのか、それとも単に見つめるだけで分かり合えるような仲ではないということなのか、それは解らないにしても疑問を感じるようなことはなかった。

初めに口を開いたのは少女だった。

「どうも生きた人とは違うみたいなの」

突然去ってしばらく顔を出さなかった青年に文句のひとつでも言うわけでもなく、少女はスタスタと青年に歩み寄る。そして、

「をう!？」

「取憑かせてっ!」

突然バツと無理やり青年に取憑こうとする。

「何しやがる!」

手を伸ばす少女とそれを防ぐ青年。取憑くといっても、傍目には

若者がじゃれ合っているようにしか見えないが、どちらも真剣という点が違う。そして段々どちらもむきになっていき、攻防も感情も高まり、さらには息も荒くなっていく。

取憑くということが、今少女がしているような物理的に引っ付くことなのか青年にはよく解らない。そして少女にも、取憑くということが今青年にしているようなことで正しいのかどうか解らなかつた。ただ自分の青年への想いの表現として最も適切だと思ったのが取憑くという言葉だった。そしてそれは青年にくっ付くことのような気がした。その先も考えられずに……。だから取憑いてみるのだ。

「いいじゃない！」

少女が青年の首に腕をまわそうとするも、少女の手首を押さえて青年はガード。そしてにらみ合う。

「くっ……。久しぶりに会って挨拶もなしにいきなりかよ！」

「あらこんばんわ！ 久しぶりねっ！」

抵抗するも、体当たりでガツと抱きついてくる少女には勝てなかつた。

「っそ……。！」

青年は少女を無理にはがし逃げた。

なぜ逃げる。それは少女と話がしたかったから。青年には少女の取憑くという行為がどこか違うような気がした。抵抗したのも自分の中に何か引っ掛かりを強く感じて、ともかく少女と話がしたかったからだ。だから本気で逃げた。

少女ももちろん追ってくる。

しかし、少女はあるところで立ち止まった。

「ここから先にいけないのよ!!！」

その悲痛な声に青年は振り向く。

「……。ってことは地縛霊？」

青年は少女の前に立った。

「違うそんな感情はないよ」

見えないが確実に存在している境界線。
寂しげに少女はそこに手を添える。

「なら何なんだ」

静かな自分の声が青年にしみ込む。

青年は少女の手に自分の手を合わせた。

「だからわたしを連れてって・・・」

少女は言ってみた。

青年は無言で少女の手を引っ張る。

何の抵抗もなくどこまでも行けた。

「あなたの想いが持たせたわたしという意味のあなたへの想い・・・」

「
青年の想いはその場所を取憑いていた。
了」

(後書き)

20070930

このような解りにくい話を読んでいただいてありがとうございます。ごましました。

それでも、最後にできるだけ解りやすくしようとしているのですが、これ以上書き込むと変な長い解説になりそうだったので最低限でやめておきました。明らかな文章力不足ですね。ははは・・・。

さて、取憑くという意思ありきな話です。ということは双方向でも、あさつての方からの意思でも、何でもいいんじゃないかとふと思いました。しかし、と同時にそれだと取憑くとはちよつと違うような気もしてきました。そんなわけで、題名には送り仮名がないんです。

何事も一方からだけ見ていては判りません。
ともあれ、感想をいただければ幸いです。

20071001

脱字修正

取憑

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7687c/>

取憑

2009年6月23日10時34分発行